

## 論文

## 沈黙に耳を傾ける — ジョイ・コガワの『オバサン』再考 —

戸田 由紀子  
(本学部専任教員)

カナダの西海岸ブリティッシュ・コロンビア州では、11月6日が「ジョイ・コガワの日」として定められている。ジョイ・コガワは、おそらく北米でもっともよく知られている日系カナダ人作家である。コガワの『オバサン』(Obasan 1981, 邦訳『失われた祖国』中央文庫)は、第二次世界大戦時に強制収容された作家自身の体験や、ミュリエル・キタガワをはじめとした日系カナダ人の手紙や資料をもとに書かれたフィクションである。物語は1972年、叔父の訃報を主人公ナオミが知らされてから叔母の家に親族一同が集まる3日間が舞台となっているが、その間ナオミは戦時中の手紙や写真や資料に触れながら当時のことを断片的に回想する。

1941年12月、真珠湾攻撃直後にカナダは日本に宣戦布告する。バンクーバー市議会は、日本軍がカナダに上陸した際、日系カナダ人が日本軍を支援し、国家の安全を脅かす恐れがあるとし、日系カナダ人／「敵国人」を西海岸から移動させるべきだとカナダ政府に説いた(注1)。1942年、カナダ西海岸100マイル以内に住む日本の祖先を持つ日系カナダ人およそ22,000人が、ブリティッシュ・コロンビア内陸に強制収容される。すべての財産を没収され、破格で売却された上に、その資金から収容所での費用が差し引かれた。1945年終戦後、アメリカの日系人は戦前に住んでいた西海岸に戻ることが許されるが、カナダの日系人は、日本へ「帰還」するか、カナダの東部へ「離散」するかという“the second uprooting”が強制された。ほとんどの日系人はアルバータ州のビート農園などで過酷な労働を強いられる。そして彼らが西海岸に戻ることを許可されるのは、1949年4月1日まで待たなくてはならなかった。

カナダ独自の日系人たちのこの過酷な試練、彼らの“cutting off of tongues”を綴った『オバサン』の出版から30年以上が経った。『オバサン』は30年以上、北米や日本の研究者を中心に注目され、多角的に論じられてきたが、その背景には1) 歴史的、2) 政治的、3) 文学的、4) 社会的な要因があげられる。

1) 歴史的要因：『オバサン』は、1970年代にカナダ政府が公表した日系カナダ人の資料、とりわけミュリエル・キタガワが書いた手紙をもとに、コガワ自身の収容所体験も織り交ぜた物語であり、歴史的に重要な作品として位置づけられる。それまでほとんど知られていなかった日系カナダ人の歴史を伝えることでカナダ史を補完する。

2) 政治的要因：リドレス運動の一貫として書かれた『オバサン』は、1988年政府の公式謝罪に大きく貢献した作品であり、それが果たした政治的役割は決して小さくない。公式謝

罪の場で『オバサン』の一節が読み上げられたこともそれを示すが、『オバサン』がリドレス運動に拍車をかけ、日系コミュニティに団結力を与えたことは間違いない。

3) 文学的要因：『オバサン』は文学的にも優れた作品である。日系収容所の体験記は他にも書かれているが、『オバサン』は語りの構造や詩的な表現が駆使され、主人公ナオミの揺れ動く心の動きを見事に捉えている。詩人でもあるコガワの詩情溢れる文体、とりわけプロローグに置かれた詩については、これまでも多く論じられてきた。また聖書からの引用が散りばめられており、仏教に根ざした日本文化の世界観も加わり、宗教的イメージの解釈をめぐっても北米や日本の研究者の間で活発に議論が繰り広げられてきた。

4) 社会的要因：『オバサン』の成功は1970年以降の北米の社会的状況にも大きく関わっている。1960年代アメリカの公民権運動、1970年代カナダにおける「多文化主義」政策によって、それまで社会の周辺に位置づけられてきたマイノリティの人々の声に耳を傾ける社会的環境が整った。そのおかげでコガワをはじめ多くのマイノリティ文学が出版され、読まれるようになった。このような社会的背景により注目された『オバサン』は、歴史的、政治的、文学的に高く評価され、アジア系作家としては珍しく多数の賞を受賞し、今では北米の高校や大学の教科書として指定されている。

アジア系カナダ人文学としては例外的にすさまじい量の批評が『オバサン』に関して出続けている。これまで主としてカナダ文学や北米アジア系文学作品として位置づけられ、それぞれの研究分野において分析されてきた。アジア系研究では日系のルーツに着目した読み方が主流であるのに対し、カナダ文学研究においては、「カナダ人」のアイデンティティ形成の物語として読むのが主流となっている。また、フェミニズムやポストコロニアリズムなどの理論的視点からもさまざまに分析されてきた。

これまでの批評家は、『オバサン』を「迫害という問題が解決する物語」、そして「迫害によってもたらされた沈黙を克服する物語」として解釈してきた。つまり主人公であるナオミが迫害によって奪われた声を取り戻し、トラウマから抜け出すことができると読む。しかし、この読みは、Roy Mikiも指摘するように、評価の視点が白人主流社会からの視点となっている。思想において白人主流社会の構造に取り込まれないためには、マイノリティの視点から物語を読むことが必要である。そこで本論では、この物語が沈黙を克服する物語ではなく、「沈黙を深く知る物語」として読めることを示し、マイノリティの視点から読んだ場合物語がどのように理解できるか提示する。ふたつのプロローグと巻末の覚書きを中心とした物語の枠組みと、この物語で重要な役割を果たす「沈黙」に着目して分析することで、『オバサン』が、日系カナダ人に対する迫害は決して解決された問題ではなく、沈黙に耳を傾けてほしいと促す物語であることを示したい。

## 物語の枠組み

『オバサン』を、日系カナダ人に対する「迫害という問題が解決する物語」として読む主

流の読み方は、物語のプロローグに置かれた聖書からの一節の解釈に大きく影響されている。

To him that overcometh  
will I give to eat  
of the hidden manna  
and will give him  
a white stone  
and in the stone  
a new name written. . . .

(The Bible)

『オバサン』のプロローグであるこの引用は、ヨハネの黙示録 2:17 である。苦境を乗り越えたものには「隠されているマナ」と「白い石」が与えられる。「マナ」は、イスラエルの民が 40 年間砂漠でさまよい歩いていたとき、神が天から降らせたパンのことである。日系カナダ人がこの迫害されたイスラエルの民と重ねられ、これから『オバサン』で語られる物語が、日系カナダ人の苦しみから（神によって）救われる物語となることが暗示されている。神から与えられる白い石の上に「新たな名前」が書かれていたように、日系カナダ人も「敵国人」というレッテルを拭い取り、正常な「カナダ人」として認められるようになるという読み方が促され、現にそれが『オバサン』の主流解釈となっている。

この『オバサン』の表紙もプロローグと同様に、「迫害という問題が解決する物語」としてこの物語を読むように読者を促す。『オバサン』は何度も再版されているが、最も出回っている表紙は、見るからに日本人らしいおかつば頭の女の子が、強制収容される時に多くの日系カナダ人が乗せられた列車の窓から悲しげな表情で外を眺めている写真が載っている。そして表題の下には、「わたしたちが忘れようとしたある時代の苦難についての感動的物語」(“A moving novel of a time and a suffering we have tried to forget,” emphasis added) と書かれてある。この文言からは、それが過去に起こって、今は既に解決されていることを前提とした語り口調が読み取れる。Roy Miki は、この「わたしたち」(“we”) が本を手にとった読者全員を指すのではなく、カナダの白人主流社会の人々を指し、そこには日系カナダ人は含まれていないことを指摘する。

The blindness to subject position—a blindness that has been endemic to CanCrit—allows the reader from the majority white “we” to inhabit the text, see through the third-generation eyes of Naomi, and reconstruct patterns of resolution for the “suffering we have tried to forget.” From this vantage point Obasan can become an object of knowledge as a Canadianized text that teaches “us” about racism in “our” past. This pedagogical legitimation expels the ambivalences of race in the nation’s forms and serves to compensate through proof that “we” have learned from the past. (Miki 143)

このようにカナダ文学界の主流を占める白人が、自らの立ち位置に「盲目」であるために、自分のものではないものを許可なしに自分のものにしてしまうのだと Miki は批判する。大多数が白人であるこの「わたしたち」はナオミと共に苦難を乗り越えることで、「わたしたちが忘れようとしてきた苦難」への解決策を見出す『オバサン』は「わたしたち」の過去におこった人種差別について教えてくれる教材として利用されるのだ。ナオミたちが働いたビート農園の白人オーナーである Mr. Barker が、20 年経ってから述べた言葉 “It was a terrible business what we did to our Japanese” (emphasis added) に同じ視点を見出させる。Roy Miki も指摘するように、強制収容から 20 年後に発せられたこの Mr. Barker の台詞からは、日系人の労働から多大な利益を得た過去が、カナダ史のなかで赦免されてしまっていることが読み取れる。『オバサン』の表紙から読者は、この Mr. Barker と同じ白人の視点でナオミの物語を読むように促されているのだ。

巻末に置かれた覚書きが、この「わたしたち」という主流白人の視点からどのように解釈されているかにも留意すべきである。巻末の覚書きは、あるリベラルな数名の白人によって 1946 年に政府宛に書かれた文書である。そこには日系カナダ人を日本に追放する必要はない理由が事務的に列挙されてある。日系カナダ人は、既にカナダ内陸に離散し、定住しているため、西海岸に日系人が殺到する可能性は低く、よって危険もないということが述べられている。この文書の最後には、明らかに白人男性だとわかる著名が 3 つ連なっている。「わたしたち」主流白人の視点から覚書きを読んだ場合、白人の中には日系カナダ人の追放に反対し、日系カナダ人のために活動した人道的な人もいたのだという事実が強調される。また、日系カナダ人が危険ではなくなったから国外追放する必要はないという文面は、裏を返せば、日系人が危険だと思われたという理由でそれまでの日系カナダ人を迫害したことを、正当化することにもなる。この覚書きは 1946 年に書かれたものであるが、文面には、日系カナダ人を終戦後さらに東部へ追いやったことへの罪の意識は見られず、迫害は、1942-45 年までの強制収容の終了とともに過去のこととして捉えられている。ましてはこの本を読む 1981 年以降の「わたしたち」読者からすれば、迫害の歴史は、遙か昔に解決した歴史であるという認識が強まるはずだ。

ところが、このような解釈はマイノリティの視点から読むと違和感を覚える。まずプロローグにある聖書からの引用を再度みてみよう。苦難を乗り越えた日系カナダ人を救ってくれるものとして聖書の引用を捉えることもできるが、植民地化の歴史を通して聖書が利用されたのと同様に、改めて白人主流社会と日系カナダ人との主従関係を補強する引用として捉えることも可能である。するとこの引用は、カナダの白人支配社会が、「敵国人」と定めた日系カナダ人を「正常なカナダ人」として新たに認めることで、従来の主従関係がさらに補強されてしまうことへの警告として解釈することもできる。その場合、この引用によって、『オバサン』は人種主義、植民地主義に根ざしたカナダ社会の構造自体を問題視する物語展開となることが暗示されることになる。

次にナオミが静かに内的な解決を迎えて閉じる物語の後に、それまでとは全く異なるトー

ンで書かれた覚書きを再度みてみよう。このエピローグは、立ち退きを強制した時と同じ客観的な文章で綴られており、そこには日系人たちを不当に迫害した政策に対する怒りは一切感じられない。ただ客観的に、犯罪などを犯していないカナダ国民を国外追放するべきではないという文面となっている。この文書の中で日系カナダ人の声は響くことなく、日系カナダ人の主体性はどこにもない。この覚書きと最初のふたつのプロローグとの間にナオミの個人的な物語が挿入されたこの枠組みは、日系カナダ人の問題が「未解決」であることを強調する役割を果たす。ナオミの個人的な解決はあってもそれは社会、政治という公的空間に何の影響も及ぼさないことを批判するテキストだと捉えることができるからだ。『オバサン』を従来の主従関係が補強されるテキストとして取り込んでしまうのではなく、抑圧的ヘゲモニーに取り込まれないテキストとして読むことが、マイノリティの視点から提示できる重要な読みとなってくる。

### 「沈黙」

『オバサン』では、“Silence”（「沈黙」）が重要な役割を果たすため、これまでもかなり「沈黙」に着目し論じられてきた。これまでの主流の読み方は、「沈黙」から「言葉」へと発展する物語として読み、ナオミが「迫害によってもたらされた沈黙を克服する」というものである。

この主流の読み方も、先ほどの聖書からの引用とは別に設置された、もう1つのプロローグが大きく影響している。このプロローグでは、強制収容という迫害を受けて声を奪われたナオミが「沈黙」に覆われている状態を表わしている。

There is a silence that cannot speak.

There is a silence that will not speak.

Beneath the dreams is a sensate sea. The speech that frees comes forth that amniotic deep. To attend its voice, I can hear it say, is to embrace its absence. But I fail the task. The work is stone.

I admit it.

I hate the stillness. I hate the stone. I hate the sealed vault with its cold icon. I hate the staring into the night. The questions thinning into space. The sky swallowing the echoes.

Unless the stone bursts with telling, unless the seed flowers with speech, there is in my life no living word. The sound I hear is only sound. White sound. Words, when they fall, are pock marks on the earth. They are hailstones seeking an underground stream.

If I could follow the stream down and down to the hidden voice, would I come at last to the freeing word? I ask the night sky but the silence is steadfast. There

is no reply.

(*Obasan*, prologue)

「拒絶」状態にあるナオミは「石」のように堅い殻で覆われた「沈黙」の世界に閉ざされており、そこで苦しんでいる。「石が溢れ出るように語り始め、芽から言葉の花が咲かなければ」、ナオミにとって言葉は何も意味を持たない。「沈黙」の殻から自分を解き放ってくれる「隠された声」を探し求めるが、それを見つけることができない。このような内容のプロローグが暗示しているのは、この「わたし」の「隠された声」を探求する物語、「沈黙」から「言葉」へと発展する物語である。

実際、ナオミは閉ざしてあった過去のトラウマと向き合う。この詩の場面は、毎年8月ナオミが叔父と行ったアルバータ州グラントンの峡谷である。ナオミの物語は、このプロローグの詩と同じ場所始まり、そしてこの同じ場所で閉じる。叔父が毎年この時期にナオミをつれてくるのは、ナオミの母の死を弔うためである。しかし母が長崎で被爆して亡くなったことを知らないナオミは、なぜ叔父が毎年この時期になるとこの峡谷につれてくるのか理解できないでいる（小説では何も説明されていないが、8月はお盆であると同時に、広島と長崎に原爆が投下された）。しかし物語の最後、その理由を知ったナオミが再び自らの意思で峡谷を訪れ、「沈黙」に耳と傾けると、以前とは異なり答えがかえってくる。

Above the trees, the moon is a pure white stone. The reflection is rippling in the river—water and stone dancing. It's a quiet ballet, soundless as breath. (271)

夜空の月が水面に反射し、ナオミには「水」と「石」とが静かにバレエを踊っているように見える。「沈黙」が破られるという読みはこのような描写から導かれる。

「沈黙」を克服するナオミの物語という主流の読み方は、他の場面からも導かれる。物語の最後に叔母さんや叔父さんやナオミの母の「沈黙」がナオミに明かされるため、「沈黙」から「言葉」へと発展すると理解される。また最も多く引用される箇所、「優しいお母さん、わたしたちは沈黙の中で共に彷徨っていた。無言であったせいでお互いが不幸になった」(“Gentle Mother, we were lost together in our silences. Our wordlessness was our mutual destruction.” 267) というナオミの母への呼びかけの台詞から、ナオミが「沈黙」を破り「言葉」を取り戻す重要性を認識すると結論づけられてしまう。

しかしおかしなことは、ナオミが発言するようにならないにもかかわらず、このような解釈が定着していることだ。日本文化において「沈黙」は必ずしもネガティブなものではないと主張する Ueki でさえ、最後ナオミが峡谷に出かけるときにエミリー叔母さんのコートを羽織って出ていくことから、ナオミがこれからエミリー叔母さんのように「言葉の戦士」になることが示唆されていると結論づけてしまっている。Davis も指摘するように、日本の文化に根ざした「沈黙」の美学が存在しない西洋では、「言葉」を失うことは、克服すべき「病い」だと考えられていることが多い (Davis 66)。病いを解決するには、「沈黙」を克服し、「言

葉」を取り戻さなければならないのだ。

しかし『オバサン』は「迫害によってもたらされた沈黙を克服する物語」ではなく、最後までさまざまな「沈黙」に「傾聴する」、「心を傾注する」(“attend”)ことをナオミと一緒に最後まで追求させる作品である。Davisも指摘するように、『オバサン』では「沈黙」が抵抗の手段として機能している。

実際ナオミが「無言であったせいでお互い不幸になった」と思ったときも、「言葉」があれば「不幸」にはならなかったと「沈黙」を否定することはない。むしろナオミはここで、初めて、母の「無言」の声に耳を傾け、それが何を言わんとしているかを必死に感じ取ろうとするのだ。

Gradually the room grows still and it is as if I am back with Uncle again, listening and listening to the silent earth and the silent sky as I have done all my life.

I close my eyes.

Mother, I am listening. Assist me to hear you. (254)

目を閉じて母の「無語」の声に耳を傾けると、海を越えてこの峡谷に届く母の力強い「無言」の声を感取る。それは母の耐えてきたであろう痛みと苦難に対する共感を促し、「目の前にいなくても母の存在／愛を感じ取る」(267)ことができるようになるのだ。

『オバサン』では「沈黙」(“silence”)が重要な役割を果たしており、大きく分けて3つの異なる「沈黙」が描かれているといえる。その一つ目は、国家権力など外圧によって声を奪われることで生じる「沈黙」である。真珠湾攻撃後、日系カナダ人はその8割がカナダ国籍であるにもかかわらず、祖先が日本人であるという理由で市民権を奪われ、「敵国人」というレッテルを貼られ、日々差別、卑下され続けた。結果、自己肯定できなくなった日系カナダ人は、戦後も20年以上にわたり戦時中の体験を口にすることができず、また自己否定から脱却することもできずにいた。叔母さんや叔父さんが戦後もずっと「沈黙」を維持し続けたのは、カナダ社会に同化し、模範的市民とならねばならないという暗黙のプレッシャーが社会からも家族からもあったからだ。

しかし叔母さんや叔父さんやナオミの母の「沈黙」は、外圧のみによって生じるのではない。それは彼ら特有の言語の一部でもあり、また彼らの強さを表わすものでもあり、抵抗の手段として捉えることができる。『オバサン』は、日本特有の文化に根ざしたこの2つ目の「沈黙」を非常に上手く描き出している。この種の「沈黙」をさらに2つに分けると、言葉で表現しない「沈黙」がまずあげられる。すべてを表現しなければ理解してもらえないロウ・コンテクスト文化である北米とは異なり、日常の多くを「常識」として共有する文化に根ざした日本のコミュニケーションにおいて、「沈黙」は言語の一部である。すべてを言葉で表現する必要はない日本語は、言わずとも理解し合えるハイ・コンテクストの言語である。何も言わないことは、西洋では「無関心」で「自己主張が足りない」とネガティブに考えられるが、日本では他人の心を読み取れる繊細な人としてポジティブに考えられている。叔母さ

ん、叔父さん、ナオミの母、そして「言葉の戦士」であるエミリー叔母さんも含めて、お互いの気持ちを察しながら交わされる無言のコミュニケーションが物語を通して展開されている。もう1つの日本の文化に根ざした「沈黙」は、「我慢」の精神から生じる「沈黙」である。『オバサン』には、「我慢」と「仕方がない」という表現が繰り返し出てくる。理不尽な扱いを受けても、ナオミの家族も、親戚もみな決して取り乱すことなく、「子どものため」にひたすら「我慢」するのだ（“Kodomo no tame—for the sake of the children— gaman shi masho—let us endure”）。よってこの「沈黙」には、辛くとも口に出さずに調和を維持しようとする日本的エートスと、威厳を保って試練を耐え抜く強さが内包されている。

ナオミの癒しのプロセスは、エミリー叔母さんのように「言葉の戦士」になることで得られるのではなく、「沈黙」を理解することで得られる。カナダで生まれ育ったナオミは、自分を取り巻くさまざまな「沈黙」を理解できないでいた。コミュニケーションの一部をなしている母や叔母の「沈黙」の言語（“language of silence”）に耳を傾け、威厳でもって耐え抜く力と強さを表わす「沈黙」を理解することで、母や叔父、叔母の自分への愛など形無きものに耳を傾け、それを察知できるようになるのである。そしてこの「沈黙」に耳を傾けることを通して得られる理解こそが、この小説で描かれている3つ目の“silence”である。

英語ではすべて“silence”と同じ言葉で表現されているが、この3つ目の「沈黙」は、言語として表わせない「静けさ」のことを指している。メタファーとしては「石」や「月」としてプロローグから最後まで一貫して重要なイメージとして登場する。この「沈黙」は、「石」のように冷たい表面に覆われていて、堅く閉ざされている。無理矢理こじ開けて中身を確認しようとしてもできない。Iwamura や Ueki は、『オバサン』における「神」や「女神」について論じているが、それらはこの3つ目の“silence”に当てはめることができる。この「愛」「神」「女神」など、形無きものは「静けさ」に潜んでいる。それは「息のように音」がない。心を鎮めて耳を澄ますように感じ取ろうとしなければ、理解できないものである。『オバサン』は一貫して「語るができない」声、「語ろうとしない」声、「静けさ」に隠された声に心を傾注し、何重にも重なる“silence”に覆われた日系カナダ人の物語に“attend”する必要性、それによって理解を深める重要性を説いている。

ナオミが自ら峡谷を再び訪れるとき、ようやく叔父が繰り返し言っていた「海のように…」という言葉の意味を理解する。その言葉には、本物の海が見えた西海岸に戻りたいという切なる願いと、しかしそれが叶うことはなかったという悔恨の念と、離れ離れになった家族親族が再会することができなかったという切なさ、しかしその亡き者たちの声に耳を傾けたいと思う気持ちとが混在するのだ。さまざまな種類の“silence”を念頭に置いてプロローグに戻ると、沈黙には、言葉が奪われることで生じる「語ることのできない沈黙」（1行目）と、試練を威厳でもって生き抜くために「語ろうとしない沈黙」（2行目）とがあり、この物語は主人公ナオミが、1）抑圧者が正当とされる知識を生み出す力を独占し、抑圧される側の声を奪う人種主義の巧みな構造によって生じる「沈黙」に対して、2）「沈黙」も言語の一部であり、抵抗の手段であることを理解し、3）「沈黙」／「静けさ」に耳を傾け、そこに隠さ



れたさまざまな思いへの理解に至る物語であることが見えてくる。

## むすび

『オバサン』の出版から7年後の1988年には、カナダ政府による正式謝罪があり、賠償金も支払われた。2012年5月、日系の強制収容から70年経ってようやくブリティッシュ・コロンビア州の正式謝罪がなされた。また同年5月、強制収容のためブリティッシュ・コロンビア大学を中退せざるを得なかった日系カナダ人76名への名誉学位が授与された。さらに2013年9月にはバンクーバー市議会からの正式謝罪が続き、「人権、正義、平等の理念を掲げ、今も今後も二度とこのような非人道的なことが起こらないようにする」と宣言された。このように見ていくと、日系のリドレスが今もなお成果をあげていると評価できる。

しかし、カナダ安全情報局長のリチャード・ファッデンが、ブリティッシュ・コロンビアの政治家が中国政府に影響されているらしいと疑ったとき、アジア系の市議会議員全員にヘイト・メールが届いた。ヘイト・メールを受け取った一人である、ケリー・ジャングがこの件について「70年経ってもあまり状況が変わっていないことの方が驚くべきだ」と述べていることは極めて深刻である。つまり、数々の公式謝罪は逆に差別に抵抗する場を奪い、本来の問題から目をそらす美辞麗句にしか過ぎないことをこの例は示している。謝罪や賠償金問題を過去のものとして処理し、気づかない間に支配者側の特権を維持するシステムを補強する。

リドレス運動に大きく貢献し、公式謝罪の場にもいた Roy Miki は、ブライアン・マルニー首相が謝罪文を読み上げると同時に、日系カナダ人が長年受けてきた迫害の歴史は、「解決済みのカナダの物語」としてカナダ政府／組織によって書き直されてしまったと指摘する (Miki 197)。日系カナダ人は、もはやカナダ政府によって不当な扱いを受けた「被害者」／部外者ではなく、正常な「カナダ国民」としての主体を取り戻すことで、逆にカナダ政府の過去の罪を拭い、その名誉の回復に貢献してしまうことになる。つまり政府の公式謝罪という勝利で日系カナダ人が「忠実な主体」(“loyal subject”) を獲得することは、同時に「リドレス以前の日系カナダ人のアイデンティティに付与されていた傷」を失うことを意味する (Miki 197)。

The potential for any given minority identity formation—“Japanese Canadian” for instance—to empower the subject is always in danger of the subject being taken hostage, “reproducing thereby the confine-and conquer pattern of dominance dear to the classic imperial quest” (“An Acoustic Journey” 7). The challenge, then, is to engage a poetics which takes on the burden of social struggle and still attends to creative acts which begin (not merely end) at the boundary lines.

(Miki “Unclassified Subjects” 199)

ここでMikiが説明するように、日系カナダ人を始めとするマイノリティのアイデンティティ形成において、その主体性を確立すればするほど、いわゆるフーコーの“docile body”のように国家に「服従」(“subjection”)することになり、従来の支配する側とされる側から成る権力構造を再生産することになるのだ。

よって日系カナダ人の苦闘の歴史を打ち消されることなく、新たな関係性を模索できるようなクリエイティブな読みが必要となる。抑圧によって言葉を失った主人公が言葉を取り戻すという、これまで主流となってきた読み方では、問題が解決されたものと処理されてしまう。つまり、もう抑圧が存在しない世界になったという解釈が出来る。しかし、マイノリティ側の視点から沈黙に着目して読むと、むしろ抑圧が続いていることを問題提起し、またその解決のためのヒントを与える物語が強調される。公式謝罪はあっても状況の変わらない社会において、支配構造の是正のためには差別が生まれる社会構造自体を理解する必要がある。とりわけ、被抑圧者に起こる出来事に関して、得られる情報から想像力を最大限に活用し、自分の身に起こったことのように状況や感情を感じ取ることが必要である。それこそが、沈黙に耳を傾けるという行為であり、ナオミがそれを理解して行く様子は、それがどのようなものであるか、そしてそれがいかに重要であるかを提示してくれるのだ。

### Bibliography

- Davidson, Arnold. *Writing Against the Silence: Joy Kogawa's Obasan*. Toronto: ECWP., 1993.
- Davis, Laura. “Joy Kogawa's Obasan: Canadian Multiculturalism and Japanese Canadian Internment.” *British Journal of Canadian Studies*, Vol. 25, no 1, 57-76.
- Hickman, Pamela, and Masako Fukawa. *Righting Canada's Wrongs: Japanese Canadian Internment in the Second World War*. Toronto: James Lorimer & Co. Ltd., 2011.
- Iwamura, Jane Naomi. “The ‘Hidden Manna’ That Sustains: Reading Revelation 2:17 In Joy Kogawa's *Obasan*.” *Semeia* 90-91 (2002):161-179. *ATLA Religion Database with ATLASerials*. Web. 14 Jan. 2014.
- Kitagawa, Muriel. Roy Miki Ed. *This Is My Own: Letters to Wes and Other Writings on Japanese Canadians, 1941-1948*. Vancouver: Talonbooks, 1985.
- Kogawa, Joy. *Itsuka*. Toronto: Penguin, 1992.
- . *Naomi's Road*. Markham: Fitzhenry & Whiteside, 2005(1986).
- . *Obasan*. Toronto: Penguin, 1983(1981).
- Lee, Jeff. “Vancouver council apologizes to Japanese-Canadians for 1942 support of internment” *The Vancouver Sun*. Sept. 25, 2013. Web. 19 Jan. 2014
- Meissner, Dirk. “B.C. Apologizes for Japanese-Canadian Internments After 70 Years.” *Prince George Citizen*: 5. May 08 2012. ProQuest. Web. 21 Nov. 2013
- <<http://search.proquest.com.ezproxy.library.ubc.ca/docview/1012163950?accountid=14656>> .
- Miki, Roy. *Broken Entries—Race, Subjectivity, Writing*. Toronto: The Mercury P, 1998.
- Rothman, Claire. “Political Clamor Drowns Out Kogawa's Voice; Sequel to Acclaimed Novel.” *The Gazette*: Mar 14 1992. ProQuest. Web. 14 Jan. 2014 .
- Spencer, Kent. “UBC Honours Japanese Canadian Students Six Decades After Second World War

---

Internment." *Postmedia News*. Mar 18 2012. ProQuest. Web. 21 Nov. 2013

<<http://search.proquest.com.ezproxy.library.ubc.ca/docview/933574583?accountid=14656>>

Ueki, Teruyo. "Obasan: Revelations in a Paradoxical Scheme." *MELUS* Vol. 18, No.4. Asian Perspectives (Winter. 1993). 5-20.

(注 1)

日本人を祖先に持つカナダ在住者をカナダ西海岸から移動させることを提案したバンクーバー市議会の申立書 (1942 年 2 月 16 日)。この申立書は 2013 年にみつかったもので、これをきっかけにバンクーバー市議会から日系カナダ人コミュニティに対する正式謝罪に至った。

PROPOSED REMOVAL FROM THE PACIFIC COAST OF ALL RESIDENTS OF JAPANESE RACIAL ORIGIN

Moved by Alderman Wilson

Seconded by Alderman Price

WHEREAS the concentration of approximately 25,000 residents of Japanese racial origin on Canada's Pacific Coast constitutes a potential reservoir of volunteer aid to our enemy, Japan, in event of raids or an invasion by the armed forces of that nation;

AND WHEREAS, citizens of Canada's Pacific Coast look upon this enemy alien population as a potential menace and feel that in the interest of National security, their removal to central parts of Canada is desirable, where a just and reasonable care for their livelihood be provided by the Federal Government.

THEREFORE BE IT RESOLVED that the Vancouver City Council representing the citizens of Canada's largest Pacific Coast City implores the Federal Government to remove all residents of Japanese racial origin and enemy aliens to areas of Canada well-removed from the Pacific Coast, and that their removal be under such conditions as will provide them with the essentials of a reasonable livelihood; and

FURTHER BE IT RESOLVED that our opinion, as recorded in this Resolution, be forwarded to the Prime Minister of Canada and all British Columbia Members of Parliament.